
第貳百廿三號

短歌

佐々木高行
高崎正風
水野忠敬
西三條實義
北畠久政
安藤篤敬
大畑弘國
竹尾正久
鍋島榮子
西四辻茂子
柳原愛子
松平健子
中島歌子
鈴木さく子

東久世通禧
津輕承昭
長谷信成
宮地嚴夫
小出粲
色川誠一
伊東祐賢
蜂須賀隨子
前田郁子
南部柳子
小池道子
佐藤艶子
增山深雪子
小西甚之助

全國……送料

明治三十四年二月十八日印刷
明治三十四年二月二十日發行

編輯兼發行人　川崎直衛
印刷人　並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元　靜思館
（電話本局一千三百七十番）

告
…に係る事務は國光社雜誌部に於て

係る事務は國光社雜誌部に於て
東京市京橋區南傳馬町壹丁目七
取扱ひ候事に致候間自今國光及
會、御送金、御通知等は總て必靜
被成下度候也

代之武士

全一冊洋假裝頗美本
定價金四十錢郵稅六
錢●郵券代用必ず一
割増のこと

眞相と變遷とを論じ兼て上下三百年間の風敎を叙し筆鋒委々時に當
武士道の關係を尋繹論明せり故に本書の如きは一面に於ては江戸風
也初版は一ヶ月に滿ずして盡き第二版を發行あすや又當さに欠之を
歡迎せらるるかを知り得べし

永館書店

賣捌所　冨山房

●東京堂●勉強堂
●林書店●岡崎屋



拾柒貫

せざるべからざるか

り。或人、何地に行かむとするかを問ひしに、皆い知らず。たゞ、他の行くが故に行くなりと。問ふ者

近來女子教育の設備機關、次第に完成に近き、女子、多きを加ふといへども、もしそれ、其の目的と

啞然たらざるを得ざること屢ならむ。彼等の多數は、

なり。然れども、これたゞ比較して、わづかに優

子に學問をすゝむる所以は、女子として充分に其の品性を發展し能ふべき智と徳とを得せしめむとするにあり。即り、人に嫁しては良妻たり、子に對して賢母たり、以するところあらむことを希ふなり。彼の女學者の如きろなり。



ることを殆ど難し。

苟も、愛情といひ得るものは、我が身の利害を



亘佐子

く含むものな

之ば、わが

こんと考へて

ること殆ど難し。

苟も、愛情といひ得るものは、我が身の利害を離れて、愛するものゝ幸福をいのり、安堵を願ひて、苦も苦と感ぜず、勞を勞とせざる熱誠の、禁ずる能はざるものあらざるべからず。古歌に、親子相愛の情をうつして、

はぐゝむもしたふもおなじ心には
何事をかはおもひへだてん

と。互に隔意あり、故意あるときは、眞の愛情といふべからず。なは、夫婦のごときは、我が配偶

て二心ある〜
、酷なりと評
大學に相應し
男女ともに、
なり。
にして、命を
民福を謀るも
いふべからず。
愛國に假るも

そも〳〵、茲に愛情と稱するものは。斯くのごとく廣からんも、これを、必然に起るものと、偶然に起るものとの二種に區別せば、その强度の範圍を知るに便なり。すなはち、親子の愛情は、今、身の原因より基くを以て、必然に起るべきものなり。兄第の愛情は、親を同じくするより、必然起るべきなり。更に、夫婦の愛情は、男女の天性に原因すれば、必然に起るべきなり。次に、愛國心の如きは、その國に住み、その歷史的觀念を有せ

如何にして吾人は言語

相投じて交
し。故に、こ

一なれども、
なしとせず。
趣致を異に
は、人類の本
骨肉相食ひ同
友情、肉欲を

如何にして吾人は言語を習得するか

安藤晴晨

限無き宇宙の間は、實に、神秘のこもれる所、際なき覆載の間に、實に、不可思議の蟠れる所、吾人、若、一度眼を擧げて、少しく思を是等に運らさむ、疑の狹霧は四方に立ち罩めて、たやすくははるけむ方やあからむ。げにや「何故に」とたづぬる事は、これぞ科學の始なるべき。

の頑儒ホイッ
らず●●
。各の人々は、
との問題は、
のものにして、
要なる性質を
の正當なる答
、之を決定す
斷しては、こ

答の中に、如何なる深意の含まれたるかを見ざる可らず。

第一に、この答は、次の二つの答を斥け、之を否定するものなり。即、言語は一の人種的特質にして、その皮膚の色、身体の構造、性質の特質等と共に、其の祖先より遺傳せられたるものなりとの事、及、言語は、獨立的に、各個人によりて製作せらるゝもの、その身体及心意の發達の進むと共に、自然に製作しいださるゝものなりとの事是な

外國に出居せる人々の小兒は、餘程の注意を以て

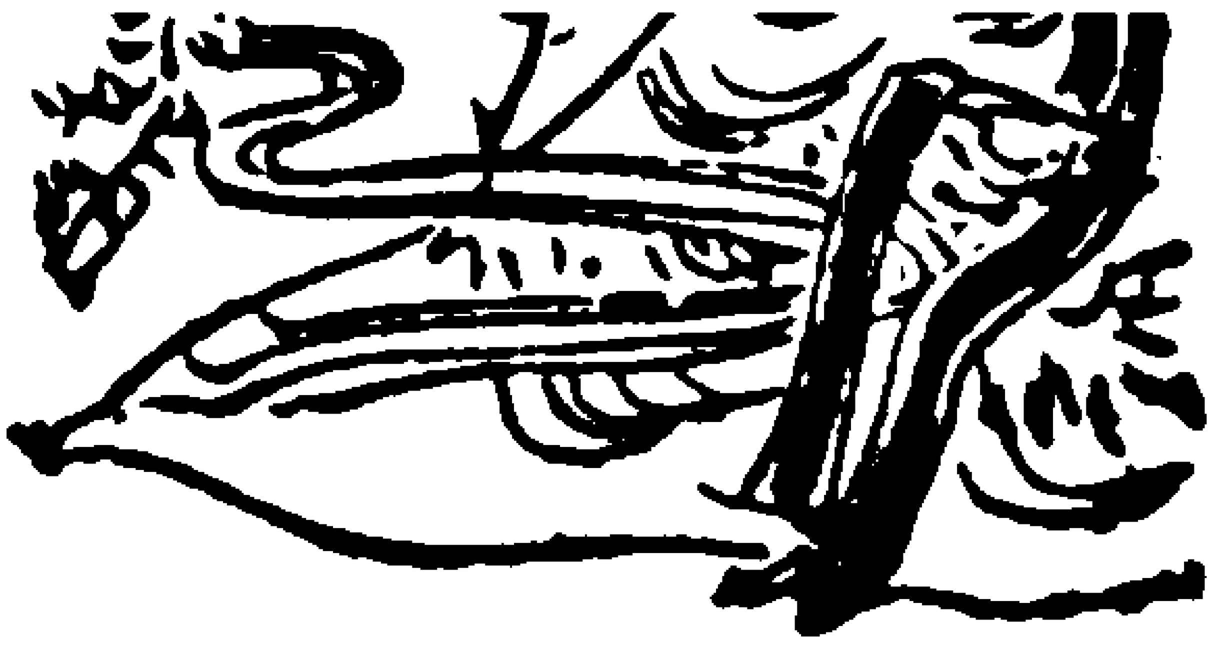
對しては、こ
定すべからざ
り。是等の謬
に對しては、
る事實を示さ
のなるべし。
なれば、愛蘭
也、亞細亞、

外國に住居せる人々の小兒は、餘程の注意を以て之を護るにあらずむ、生長するに隨ひて、その外國語を語るに至るべく、或はその外國語、並に兩親の言語とを、等しく容易に物語るに至る。宣教師の家族の小兒の如きは、此の種の最も驚くべき例となしうべし。彼等は、世界の何處にあるに論なく、其の語法が、如何に關係うすきものなりともまたは、全く無關係なりともそれらに關せず、彼等は、其の土地の小兒等がなす如く、自、その土地の說話をなしうるに至る。而して、亦、其の

て、近代の羅
にて、他人種
く、言語も、
極めて稀なり。
を律し他をは
混同し居れば
の言語を用ゐ
英語の如きは、
の上に於ては、

れば、一を以て他を律すべからざるは明なり。吾人の、言語が遺傳せられたるものにあらずとの事は、上にのべ來りたる所にて明なるべし。上來の例は、後に到りて、吾人が言語の習得に就きて述ぶべきものと、相俟ちて大に力あるべし。





禧謹述

り、一ならず。

賢人と稱す

國によりて、

ことなく、之に遵由して、可ならずといふことなし。實に、天下の大道にして、萬世の大經なりと謂ふべし。

人、或は謂はん。忠孝と稱し、五倫五常といふも、もと、支那の文字なり。而して、我には。其の實存在したりとせば、此の道は之を我が國及、支那に施して行はれんことは之あるべけれども、かの國體を異にし、風俗を殊にせる西洋諸國には、決して適用することは能はざるべしと。これ未だ我が道の正大なるを知らざるなり。彼の歐米

人にも行ひ得
現今の如き君
は、其の全き
べし。然れど
天地の大經た
主を得て、泰
國は廣く、峻
し排きて、斯
中に呻吟せる

限の洪徳深恩に報い奉らんことを期せざるべけんや。高大神聖にして、萬古不易なる大道は開闢以來、神州の天地に磅礴し、時に顯晦ありきにあらざりしかども、曾て、湮滅せしことなく、歴世の　皇上、之が中心とならせ給ひ儀表を、萬衆に示させ給ひて、以て、歸向する所を知らしめ給へり。而して、今上天皇陛下、今又、祖宗の遺範を明徴にせさせ給ひて、聖諭を申ね、御身を以て衆庶を率ゐ、齊しく、美徳を成さんと誓は

し、優渥なる
心として寤寐
躬行實踐を期
全ふせずして

利三郎

いふがありけ

喜兵衛といふを迎へて聟とし、二人して孝養を盡しゝが、父母みまかりてより、如何はしけむ、喜兵衛は、日々に、其の心あら〳〵しうなりまかり、人々にもいたく惡まるゝやうになりぬ。或時、新に田地を求めんとて、彼の僅の山畠をば人に賣渡すべきに定めたりしを、りき女聞出して、夫の爲させたまふることを、とやかく申すべきにも候はねど、此は父の紀念にて候へば、同しくばおぼしとどまりてむと諫めしを、もと媒妁せし人の聞つけて、りき女のいふところ道理なりとて、遂に、喜

はかにも、身を
せぬ。これ皆、
いかにもして
したまはれとひ
一族のものは、
更に是のこと
縁きらせむとば
じとて、同じこ
みて、はが不圖

は、いまだ心を悛むるに至らず、またも過失をさへ爲いでゝ、領内を追放せられぬ。例の心に、日夜夫の行衞を案じ、年月を憂の中におくりければ、人々、いとほしがり、如何にかして思忘らせむとて、喜兵衞は更に妻を迎へ樂しく世をすです由、言聞かせければ、然やうに候か。今は身一つにて、如何ある地にてか如何ある憂目を見るらむとてこそ、年頃、思屈し候ひしか。然る上は、世渡のはざも、せめては、心やすかるべくやと、少しも恨む

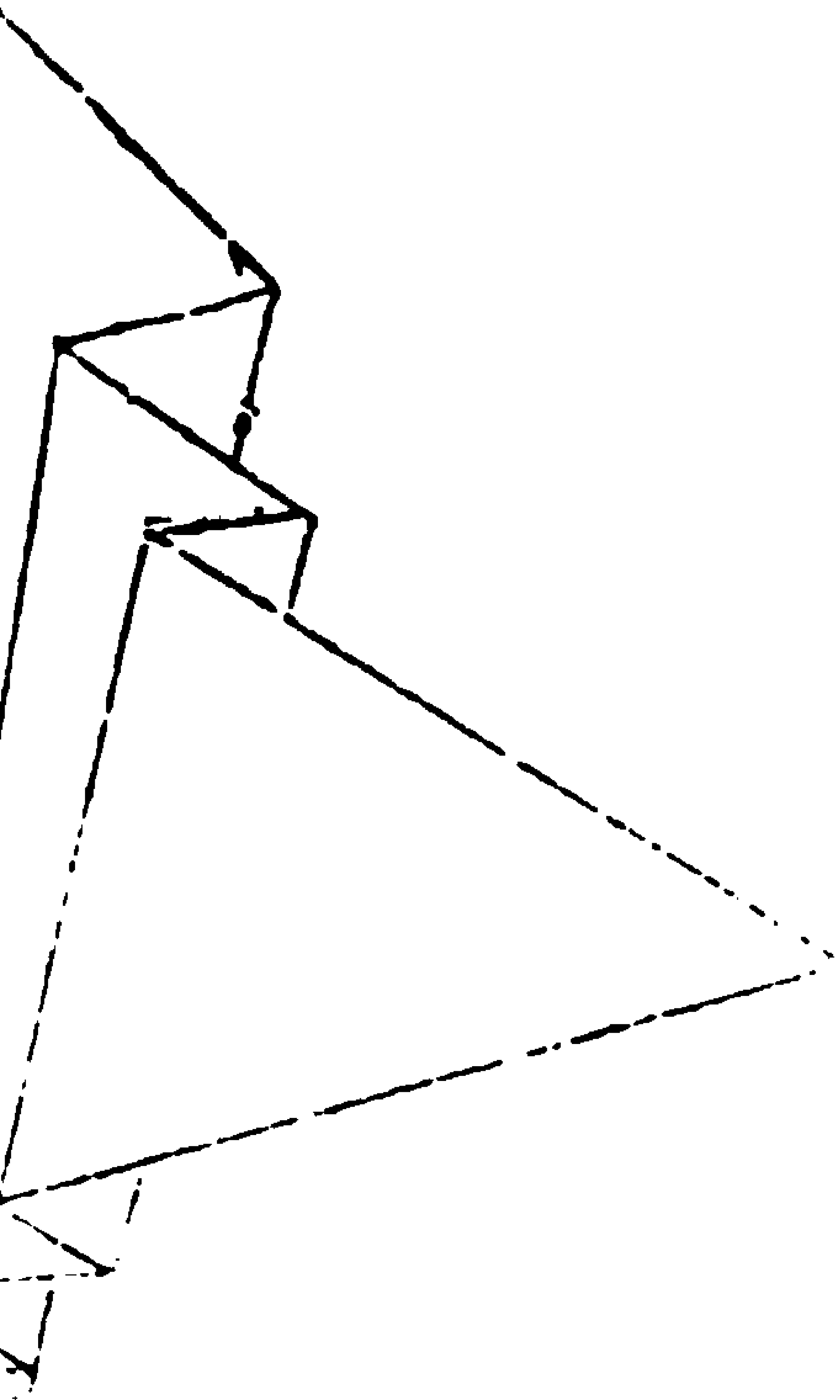
方もわるやう
、遂に此處彼
が、いまだ其
にわびしく世
ゝに心をつく
ゝに立つるこ
の貞節には、
に、とりおし
と、とて、喜兵
に立歸らしめ

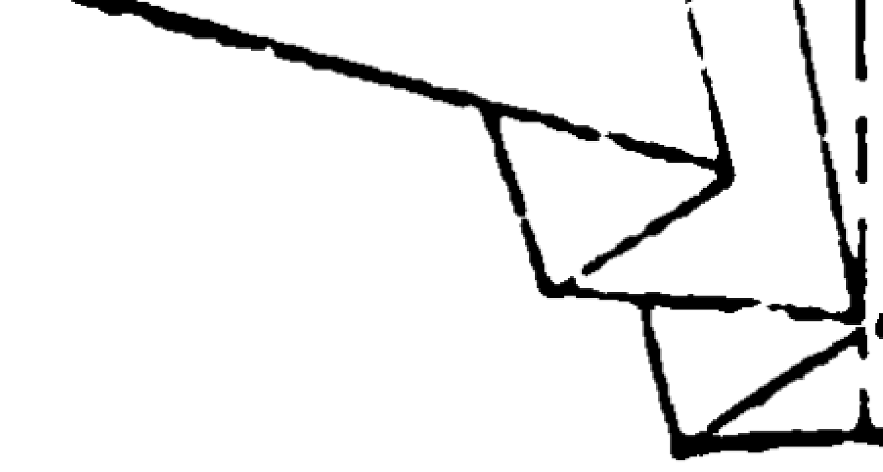
折方

柳樽の蝶

有住くわう子

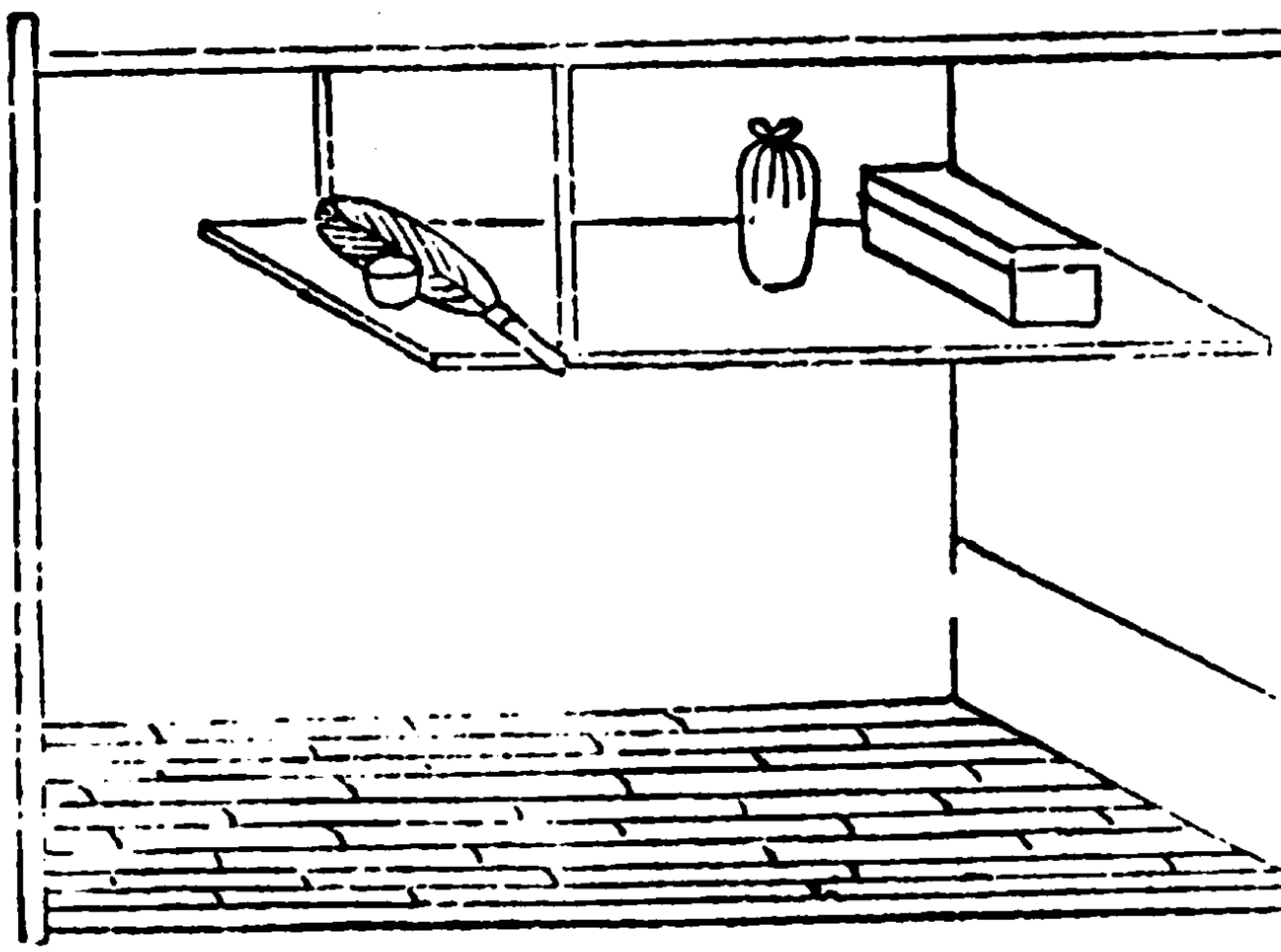
雄蝶





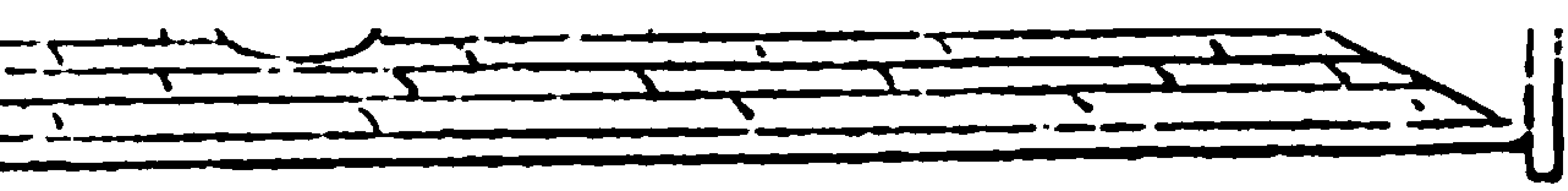
は、中の筋を裏

第一圖　宗旦翁



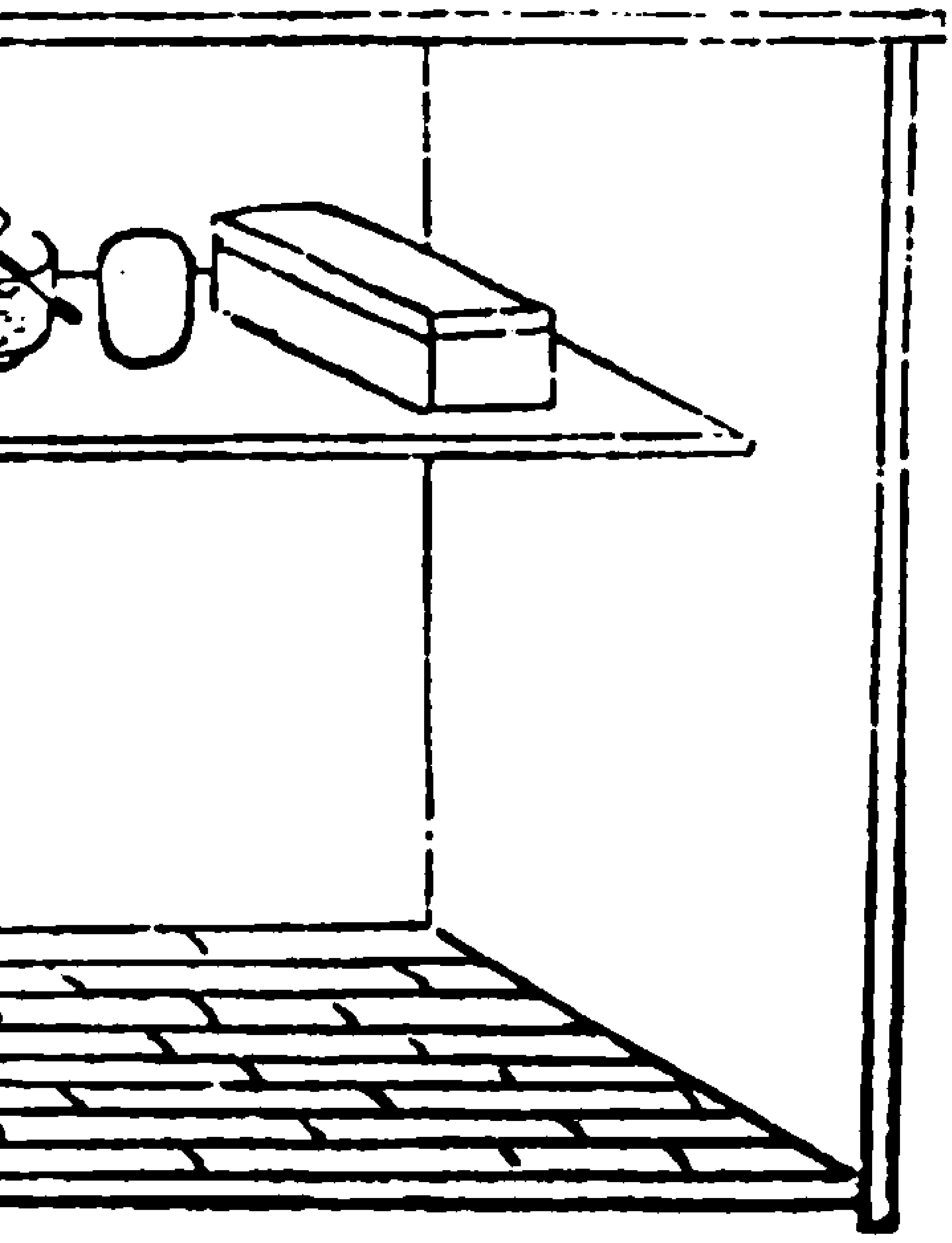
入、左の方に

第三圖は、又、極老人の所用する場合あり。



べ、左の方に

第三圖は、又、極老人の所用する場合なり。水屋瓶に、水漉して入置き、柄杓にて水指へ入る。兩器飾りてもよし。此の水屋道庫斗は翻を不用、簀子へ直に湯水をこぼすものなり。是は、宗旦翁、二疊敷の向切本勝手に被



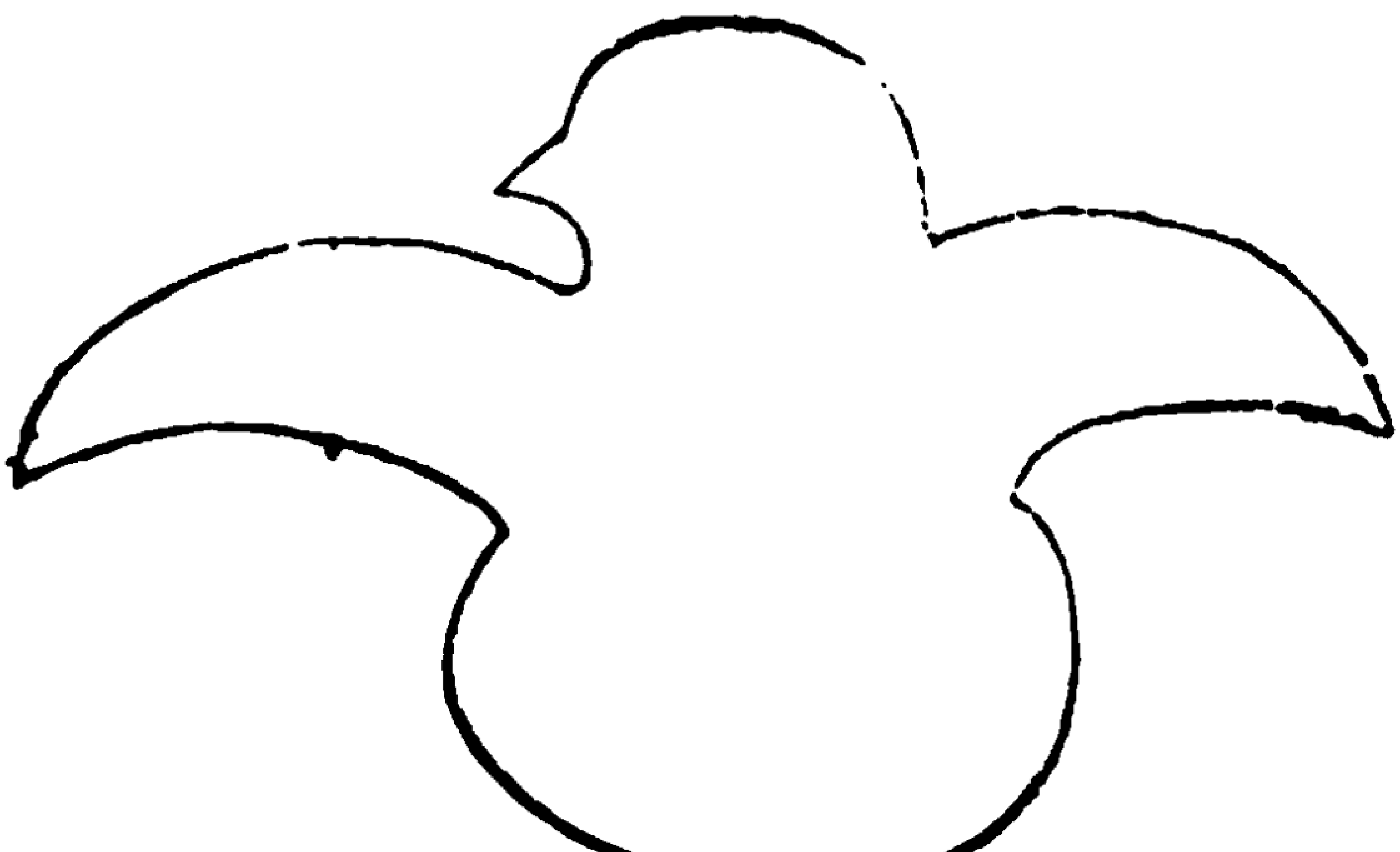
第三圖

ら、茶禮初學も

と、御注意の上

たい子

入れたる處など、よく引きあはせつくろひて、左の如くにくみ合せ、裏をばかやうの形につくり、例の如く、紐をはさみおきて、裏表合すべし。切は白ちりめ＊



＊ん、白絹などにて、嘴を、黄などにぬりて畫がき、首の上へ、翼のさき、胴の下等を紅にてぬり、翼、尾、

椀に盛り出すべし。

白魚黄身酢

先づ白魚を、ゆで置、次に、鷄卵をゆでゝ、黄身を能く摺つぶし、酢にてどろ〳〵に、とかし食鹽砂糖を加へ、鹽梅し、白魚を皿に盛り、其の上へかけて出す。

から卷酢

豆腐のからを能く摺り、ざるにて漉し、漉したる汁を、又布袋にて漉し、これを、味淋、食鹽、酢にて鹽梅し、鍋にていり（種々の野菜抔加ふるも宜

若樹

合止美

岐志津

廾泰次郎

村宇米

のみにして

贄へは四方

用

一 杯

あへつくり（鹿の肉 白豆あへ）　一 杯

別に たひ（うしほ）　一 杯

折櫃（くつがたのもち おこしごめ）

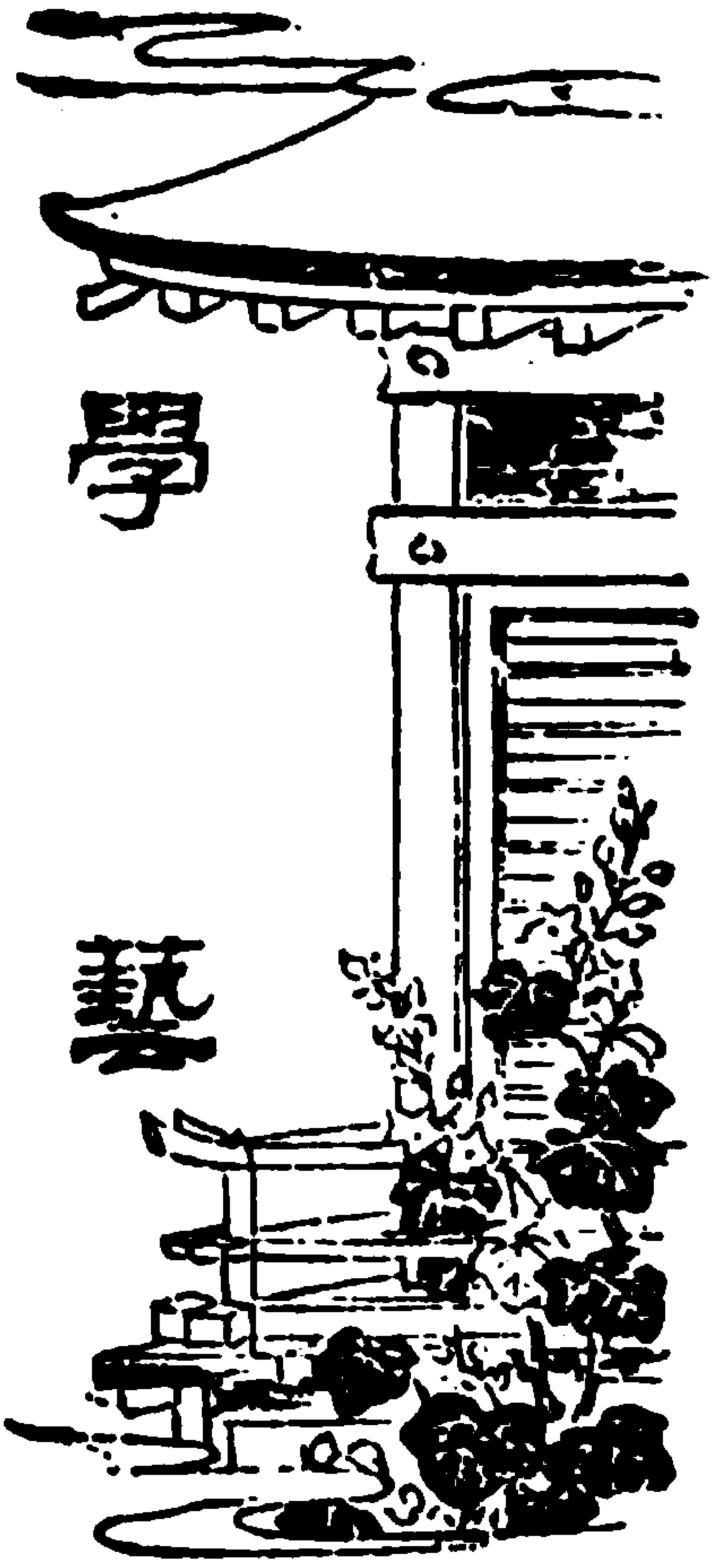
酒盞（土器）

銚子（長柄兩口）

以 上

右の順序の獻ぐみにして、先、第一に鹿の庖丁あり。次に高杯をすゝめ、初獻の肴をすゝめて、長

、二こん三こ
ものをすゝめ
とせば、陪膳
子にのせて退
。後に、膳部
の參考にもと



漢文學講義

佐々木天游

梅溪游記第七

齋藤拙堂

還抵二嵩村一。舍レ舟上レ岸。綠竹數畝臨レ水。亦梅溪中
不可少者也。西麓梅花亦多。[illegible]

斂むり、蒼靄變
て巓に至る
匿するを得るな
然として、疊
識するに、皆白
を得たるものな
繍ること、止に
なり。適々天復
し、舞蝶の空を

とは、舟をオヂルことなり。）溪川の岸に上りアガりましたが、丁度、其の上りました所の溪岸には、青々とした緑りの竹が、畝畝か（畝は、說文に六尺を步となし、步百を畝となすとあります。數畝は三四畝なり。）栽りて、溪水に臨み傍うてをりますが、梅と竹とは、共に映寫て、趣きをなすものでありますから、是の緑竹數步の景色も、亦、梅花溪中に、無くてならぬ所のものでありますのヂヤ。（不レ可レ少とは缺いてならぬと謂ふこと、即、

山の下にも、
ありまして、
に連り續きて
眺めました
おして居りま
（梅の花が連
游に見立て、
りました所よ
行きました所
まして、其の

で、山の眞中程の梅花が、雪の樣に咲亂れて、居ます所の中に、（梅の花がぷん〳〵として、白く咲滿たる有樣を香ばしき雪と形容したものであります。）一つの大ある岩石が、突出てをりまして、サウシテ、其の岩石には、一面に青き苔が、（鮮も苔に同じくコケのとなり。）被むり、生へカブリて居りまして、蒼鬱（蒼鬱は、蒼々と苔生さまの形容詞あり。）と青々と。苔生だしたる樣が、賞愛して、見愛べき姿であります。ソコデ、其の石の上にゝりウタケまして、（踞は、腰を掛ることとあり。）暫時の

て申しますと、那の魯の國にして。遙かにしまするに、るが如くに、方を眺め望み、皜然として、雲で埋めた樣でありますが、

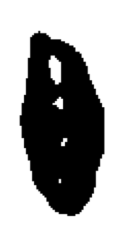
其の月が瀬と云ふ名稱が。雅訓デ。（史記五帝本紀曰其文不雅訓駐訓同訓典雅之訓也とあり。茲所にては、雅訓の二字で、ミヤビヤカの意と心得べし。）ミヤビヤカなる好き名稱と云ふ計りのみにあらずして、其の景色も亦梅溪中の第一ギヤからして、月が瀬の名のみが、世間に著名なのも、尤なことでアラウと、少しく咏嘆するの心持を以て月が瀬の勝景を賞讃したものであります。時に天の空が、復再び陰りまして、雪が盛んに降り出し

迫りまして
を吹立ます
所の胡蝶が
面に雪の降
に見立て丶
奇妙な面白
ので有りま
て、渡舟を
ました。偖
の景色も一

和畫通信講義　第六回

山崎彩峨

最初に、開花の辯を、符號の順に畫き、次に花臺を附し、次に、枝様に、次に、花と蕾との距離に注意して畫くなり。

これを墨にて畫くには、花は、淡墨、花臺は、片端に濃墨を附して、一度、又は、兩度に畫くべし。（一度  二度 ）枝は、挾墨にて、芽は、淡墨にて畫き、後、花瓣へ、 淡墨にて環を入れ、



十
十三
九
七
六
三
五
十二
十一
二
四
一
尖





一御前にて、火鉢へ炭つぐ事あらば、炭斗に火筋と羽箒をとり具し、御前へ参り、我が左へ炭斗を置き、火鉢を少し引き下げて、火筋をとり、下た火をかたよせ、炭を程よくつぎ、火あひしらひて、火筋を炭斗へ入れ、三ッ羽をとり、火爐のうちを、向より手前へ三はき、手前のうちを、左より右へ一はきして、箒を炭斗へかけ、火爐を御前へ進め、二ひざばかり下がり、炭斗をとりて右へひらき退くべし。下火を片よせる

ふせつは、か
道わるべし。
りて筯を用ゐ
も、それは今
ひ、よく拭ひ、
つかひても、
、爐の胴炭を
よく洗ひて、
御前の炭の事
見えたり。

指をふたへかけて、手巾を押へ、始より末まで湯のとされぬ様にかけ申すべし。終らは、湯桶を下に置き、手巾を參らすべし。濟みたらば、手巾を元の如くに蓋しおき、湯桶をたらひへ組付て持退くべし。

一襖障子明立するには、そと下に居て、右の手を引手につけ、さて左の手を襖の緣、障子の親骨へ添へ、兩手にて開くべし。しむるときも同じ。我右の方へたてつける時には、左の手を引手へ掛け、右手をそへてたてつけ、さて、手とひき

べし。

〜〜〜

直　方

短は以って、反省

ころさの惡をなすべ

も、具氏は自由派の議員撰擧競爭に連戰連敗し、窮苦甚だし。而も、憤慨愈々熾に名聲漸く揚る。

夫人は、夙に、具氏の高風を慕ひ、具氏亦其の淑德を愛し、遂に結婚の式を擧ぐ。爾後、幾多の撰擧競爭に、夫人は惜氣なく其の資を投し、常に具氏と車を同ふして東奔西走し、具氏が爲とし云へば、未だ嘗て其の身命を惜まず、刻苦碎礪、唯具氏の大成を之れ祈りぬ。

具氏は、極めて規則正しき人にて、其の家庭に於

安からず、嚴
人の淑德之に
くして黄菊蘭
具氏夫妻に事
に於て怨聲苦
他は、政事界
刑を現はし、
す。之、具翁
懇篤ある家庭

に遭遇し、未だ良答案を得ざるに、時既に移り、車を驅つて家を出づ。而して、具氏首を垂れ思考の淵に沈みぬ。夫人は、車窓を鎖さんとして、過つて其の指を挾み、痛苦耐へ難きも、騒かば具氏を妨げんことを怖れ車の議院に着するまで之を忍べり。斯くて、具氏が默考し得たる結果に、議場に於て滔々辯し去るや、喝采の聲四邊に起る。此に於て、夫人は初めて愁眉を伸ぶ。

夫人の具氏に於ける、實に斯の如くして健全なる家庭を築き、良人の事功を大成せしめ、良子女を

園主人
ゝるものあり。
しが、ある時、
げる中に、孤
し出だして、走
ひけるは、枕の
はとかけるも、
衛門これを聞き

あり。そのかた
に似たり。

同國鳥山村の聟のかたへ、ゆきてかへらず。それより、妻は、度々鳥山村に來りて、いろ〳〵にいひはぶれども、一言の返答もなし。聟のかたにて、只だ一二日の滯留と思ひゐたるに、年を重ぬれども、歸るべき氣色も見えず。皆々の心づかひに預る事よといふ事だになく、自若として、おのが家にあるが如し。

右は、蜀山人太田南畝の隨筆なる、假名世說といふに見えたり。之れ、即ち、女の用意を示し

り。そのかた
は、必ず怒る
の短氣偏狹な
之れに逃れ
ひして、はし
弱の怒に、數
そそのおろか
日頃の氣質は
らじ顏に物す
…か…。

と　賤しき者のなき學をいへるは　物學びたる
に似たり。
之れも、假名世說にあり。下婢の言は、まこと女の情としていふべき語あり。僕のいひつる言は哲言めきて、よくその分際を知りて、短を棄て長を取るといふ、長者の口吻ありといふべし。

辛丑の御代

山岡澄雪

も、古史に傳

孝王が、忠王

西洋紀元前四

土にして、希臘

レスが、サモ

飢饉に遇ひて、

に至りまつる、

の歳正月、崩じ玉ひたれば、大和國葛城郡掖上村大字玉手ある、玉手丘上の陵に葬り、大倭帶日子國押人天皇と稱へ奉れり。

天皇の十三年は、即ち、辛丑なれど、何事も傳らず、唐土にては、周の安王の二十二年にして、齊が燕を伐ちたる年にて、西暦前三百八十年に當り、希臘の詩人として、當時、戯曲作家中、喜戯に於て、其名、千古に高き、アリストファネスの永眠せし年なりとぞ。

た皇居となし、皇居を、大和國城下郡黒田に定めさせ、之を廬戸宮と號け玉ふ。御在位七十六年、

立りまつる、
大君の天の
、おはしませ
實に第六回
王の後を嗣ぎ
元前三百二十
・レミーが猶
チゴナス、ニ

て皇居となし、皇居を、大和國城下郡黒田に定めさせ、之を廬戸宮と號け玉ふ。御在位七十六年、御壽百二十八に渡らせ給ふ、丙戌の歳二月、崩去ましませしかば、大和國北葛城郡王寺村なる片岡馬坂の陵に葬り、大倭根子日子太瓊天皇と稱へ奉れり。

天皇の三十一年は、實に辛丑なれど、亦、記しまつる事なく、支那は、恰も、春秋戰國時代にて、彼の、秦の昭襄王が、白起をして、趙を大に、今の山西省高平縣の西なる、長平に破らしめたる、

玉ひければ、今
剣池嶋上の
皇と稱へ奉れ
十五年にして、
ず取りし、當
れて、匈奴に
前二百年に當
ル人等の、再

して、皇太子に立せ給ひ、癸未の歳十一月、御即位ましくて、物部大綜杵の女、伊香色謎を立て皇后とし、皇居を、大和國添上郡の春日に定めさせ、之を率川宮と名づけ給ふ。御在位六十年御壽百十一におはします、癸未の歳四月、崩じ玉ひたれば、今の、添上郡奈良油坂地方町なる、春日率川坂上の陵に葬り、稚倭根子日子太日々天皇と稱へ奉れり。

天皇の十八年こそ、辛丑なれど、此れ、亦、史の

相とあり、又、
せんは、おいおくとつゝみたるを、中將しひて

和とあり、又、
にて、西暦前
スが、羅馬
ふ。
一
八寄贈
女遺稿
ゝにおはす。

せんは、あいなくとつゝみたるを、中將、しひて
たづね給へば、あるじは、左の大殿のむつましう
思す人にて、からいなとかすまへられて、常にま
ゐりかよひける、此ごろ、殿のうへ心ちわづらひ
給ひけるに、陰陽師など方あしゝとて、しばし所
をかへてこゝろみ給ふべう申により、こゝは所も
おもしろく、夏山の木たちも涼げに、京のうちの
らうかはしかりしにひきかへ、しづかなるが、あ
はれになつかしき住居とて、あからさまなるやう
にて、うつろひたまへるよし語りきこゆ。中將、

ありつる夢語
給ひ、こゝろみ
返しの、さな
わがきのふの夢
ゆ、たがはざり
かねてぞおぼ
ことに思すに、
人をかたらひ給
さのみに、こ

ほどあそびし給ふ。わすれがたかりし都のことども、
此の頃は、さのみ思ひいで給ふことなく、めのまへ
に、とり〴〵なるいまめかしさの、さしつどひて
して心うつりて、故郷にかへらんとしも思はれず、
うちまぎりゆくめり。はた、年頃こゝろつくしにう
ちわび給ひし殿のうへも、つひにはいのこと見奉
り給ふ。思ひのほかに、女方心をかはし給ひ、
京にて、こゝろきこえ給ひしをり、つれなかりけ
る、餘波なううちとけ給へば、いとゞ、世にしら

かはしつゝ、はた、人の御にわすれかねじかむ、近くう、貴はかにおほく見るにかせたるさま〳〵しくうちなるがめでたは、袖にもつ

ぬを、あやしとけしきとり給ふが、わづらはしうて、文なども、おもふやうにはえかい給はず。まいて、うちとくべくもあらぬ所にて、たえず心つかひもせられ給ひ、わるじなどの、あやしとうちかたふきぬべきも所せければ、女君をも、人めばかりはめやすくもてなし給へど、下の心は、ことの外にて、いとをしさなども、さのみにおもはれず。ここにとまり給ふ夜も、たましひはあなたにゆきて、心もなきやうなり。このことの後は、心地わづらふよしにて、もとの山にのみすみて、女君のもと

るに、又おきた
きことありて、
のするなり。今
ま心ゆかずと見
ず。男君、こと
みしらぬさまに
せ、さうそく奉
ひたえつること
月はおちていれ

とこそ見れ」いのちそしらぬと、きこえたまふ。
女君、
人しれぬ中にかよへる逢坂はたえぬ道ともいか
がたのまん」いでや心はこの給ふも、ことわりと
おはいて、かくておはしましけるを、ゆめのうち
にもしり侍らざらんか、いふかひなく、あはつけ
きやうなるさま見え奉ることも、あるじの心や
ふらじとてなん。ゆめ、みつからの心には侍らず
とて、末の松山と、かへすぐいひしらせ奉りた
まふ。

（未完）

入鶏巣
峰巒不美
目を塞がせ、
捨させ、外へ
そのまゝ置
いふ。
く利休居士な
庭の蹲居の

下に落ちて、ちようろく云ふものあり。）就
ては、其の水流の上へ、（五郎太石を積置きて、
此の穴を隠す事法あり。又、直に下の流しへ落
つるも興あし。上より遣ひこぼす水は、此の石
共に掛りて落つる故に穏なり。其の五郎太石
の數不レ定。大小も、流の中の廣狹にも可レ依。
其の石の入置方を、本文の如く敎へられた
り。左も置きましたと云様になりては、不二
面白一。兎云て、餘り雜風景も無レ興。斯の所が、
茶にて了解に困む所あり。本文を能く御覧有

…中將といふ人
を削補せしもの
曰はく
…冷泉爲兼卿
…の御むすめ將軍
びさゐらせ、女
…すまたやむこと
…あまれるをさり
女の内をおさ

のせ、四卷には、女の心得べき事から、くさぐさあつめたり。

女學範　二卷　二冊

大江資衡の著にして、明和五年の刊行あり。資衡字は穉圭、京師の人、通稱は久川靱負、玄圃と號す。草盧の門人にして、詩を善くし、亦書を能す、寛政中、年七十にして歿す。此の書わづかに二卷の小冊子に過ぎざれども、提要よろしきを得、簡にして略盡せり。他の無

るべし。その

にして、この書はその下巻あり。附録には司馬温公家範及婦人六徳和解あり。

女中心得書　五巻

此の書、寛延二年に、志田蕘齋といふ人、大竹氏お卯生といふ婦人の爲に、女子の心得べきあらましを記されたるものゝよしあり。その目録は、

第一　縫ものゝ巻
第二　萬かよひの事
第三　酌の次第
第四　産所の次第

五卷
奥田松伯軒と
』……祝言は人

に二卷以下は後に書加へたるものにもやあるべき。繪は例の元祿ものにて人倫訓蒙圖彙に次ぐべきいと珍らしきものあり。

目錄

女訓手習かゞみ（繪入）　一卷

いふ人の輯む
十部なぜの女
したるものな

巻一册

にしへ、孔門の高弟曾子は、至孝の人にして、孝經を著し、是に慣て、唐土に、後世女孝經十八章の書あり。今此の冊は、或人彼十八章の意にもとづきて、日のもとの言葉に和解つゝ、貴きより賤き迄の孝道を説るなり。愼て是に從はゞ、宮仕には、男子に勝る忠烈を顯し、他に適きては、孝婦貞操の名を以て、父母の名を揚、子孫萬世の繁榮を基せんこと、鏡中に影を見るが如くならん。文政壬午春、高蘭山翁演』とあり。さて教諭とは、或は書賈共の蛇足なるべし。

名
其
錦女増姫を、
の丸の御奥へ引
の女中へ示され
足らざる短篇に
情言外にわふ
論するに足る。
のに、老の心、
野邊の若菜な

らせ、三勝の家に行きて急ぎ伴ひ行かむといふ、折から平三は暫時の用にとて不在なりしが、余りにせき立てられて、遂に術中に陥りぬ。哀れや三勝はある者に伴はれて途中にあり。既に危うく見えたる處に、平三の歸るにあひて、こゝに一ッの修羅場は開かれぬ。白刃棍棒相閃めきて、やらじ奪らんの奮激突戰、機を見て蝶九は、驕なる三勝を抱きすくめて、急にもて行かんとする折から、かねて厚倉に約したる半七は現はれぬ。惡むべき

さんとするか
河原づたひに
白河の山中に
の時雨やみて
、あはかき曇く
勝をかきおろ
く將て來つれ
て、その奪ひ
家の爲に、親
、不義の濡衣

て自殺し果てん。鬼々しとは思へども、忠義にか
ゆる慈悲はなし、云々と云ひきかせて、あはや秋
水一閃頭上に晃めきて、年來あつかしと思ひ忘れ
しことあき我妻の、花顏嬌姿を紅血に漂はせんと
せり。

緣故はかくの如し、不便ながら盛の花を散らす忠義の太刀
風を、彌陀の利劒と觀念し、佛果を得よといひもあへず、閃
りさひき拔く刄の電、すゝきがくれに三勝は、あなやさばか
り飛びのくを、きゝわけなしと半七が、又つきかくるをかい
くゞり、裳裾蹴かへす夜あらしに、山川の音すさまじく、あ

死なんとする時
思ふことは何に
慰めとひぬ。
おしのごひ、恥はし
こさうみの親には侍
母には生き別れ、父
を去り、仇ある人に
行は盡さずとも、不
れに、隔てず仕へし
が養父にうされ、

さけて音づすればその父親に、捨てられたるを恨むに似たり、
しからは夫もいかばかり心苦しくおぼすらむ、逢はずにおく
かれ死ればさて、阿翁のかくれたを世に知らせ、夫に恥は見
せじさて、こゝさ彼所にありながら、遠かりたるまごゝろは
さがで、今よび見も知らぬ、人に忠義を立てさせて、今の
親には孝ならず、色情ゆゑにげも、走りしかさ、なき名を人
にうたはるゝは、いかばかり悲しけれど、身の悪業はなげゝ
ご及ばず、護身涙は夫の紀念、内なる燧は母にあふ、割符に
せよさて、亡父の、のこしも侍るなり、涙の雨は絶はずふる、
笠屋三勝が身の果を、ながらん後に傳へてたべ、その夫の名

の旅は口籠りぬ。
ていかに。驚
萬無量の感愴
ぎりしあらん。
も、これ所謂
年の苦節こゝ
全うして、期
のよろこびと
て、此の夫婦
。

夫婦たる事を知らば、誰か非難する者あらむ。一日ありとも、妻とよび夫と呼ばるゝは、將に、三勝が年ごろの節操に報ゆる所以ありと、罪ゆるさるべし。ひと先づ近江に身を忍ぶことゝなしぬ。

さは云へ、父はわれ故に、罪得給はんかと思ひやる、大和にあらぬ山の端を、ふりさけ見れば月魄も、やゝ傾ぶきて木の間漏る、遠寺鐘も音づれて、草葉に集く虫の聲、いとゞ哀をますほの薄かきわけてゆくほどに、白河山をうちこえて、湖水を見れば漣や、わがしかかくす陸もなく、夜はほのぼのと明けにけり。

(以下次號)

はしなん、な
とを考(かんが)ふるに、
る。花(はな)に、心(こゝろ)
山にはじまり、
の宮(みや)よりなん
良(ら)の御世(みよ)にい
たみに、みや
ぶること、皆(みな)、
る。かくて、

木(き)こる山(やま)かづ、いぶせきふせやのしづのめまでも、
月(つき)と花(はな)とに、心(こゝろ)をよせざるなんあらざりけらし。
さるは、かけまくもかしこき、おほみあそびの、き
は、ことなるが中(うち)にも、月(つき)と花(はな)とのためには、時(とき)
にのぞみて、ことさらに、うたげのむしろをまう
け給(たま)ふ事(こと)、おきてたがはず。のどかなる御世(みよ)のた
めしにさへ、なり來(き)にけり。かく、さまぐ\なる
よゝのあとを見(み)るに、いにしへも、今(いま)も、高(たか)きも
みじかきも月(つき)と花(はな)とを、うむかしみおもへる事(こと)、

いづれをた
たる人、たれ
其のよしあ
にもありぬべ
るに、ゆゑあ
かれにはあ
り、身にたぐへ
てかあからん。
、しきにより、
こすある。今、

たの月ぞ、身によそへつべき。かゝれば、花には、
おのづからにうとく、月にぞ、心のひかれける。
さはいへ、こは、わが身ひとつのすさみあり。お
はよそ人のためには、いかでか、まわびもいで
ん。（拾後集）

旅のらくがき

明治三十三年熊本の旅舎に於て　深山庵主人

（九）諸國土音の異なれること

こ』の長崎人も、
敬稱して奥サン
ては、尙ほ古
は多く、地方人は
云へり。關以東
もよく、廣島附
行はる。九州に
前に云へる所

遠く廣島に來りて、傳唱せらるゝを見るは一奇なり。殊に、其の語の活用廣く、關東のダンベイは茲にて『ガンヒヨウ』となり、更に『ガンヘン』(御座いません)の新語を創出するに至る。『可部の願照寺に説教がガンスか、ガンヘンか、ガンヒヤア(なれば)、ガンスやうな話が、ガンヒヨウが、ガンヘンけに(から)、ガンヘンのでガンヒヨウ』之れ、ガンスある語の活を示して、餘蘊な

意味を、一行く
いふは、今は殆
示こてよ、『サカ

きざるが如きとは、寧ろ、奇と云ふ可し。

…は、今は殆
…ては、『サカ
『けに』とい
バッテン』と
明にいひ切
或は左様で
様でござりま
る』に一種の
時は、或は噴
オッ』『オッ

わが友の一代（上）

（あるおばあさんのはなしによる）

田山とり子

誕生の歳に　（御父様いはく）

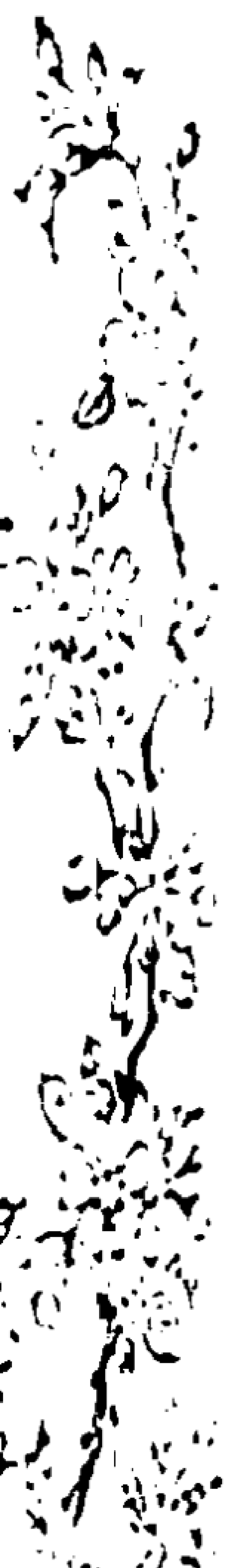
はじめに男兒、ついで女二人と三人の子供を死去
れたが、今度の女兒も、所詮成人はしまい。

二歳の時に　（御祖母様から）

鶴は千年の齢を保ち、龜は万年をも超ゆるといへ

が瓣に、火の玉
れから琴の老師

いはく）
居らッしやるけ
一番かわよくッ
にもうれしかッ
處へとせがまれ
らないことよと
の女將が）



…の美人は皆　琴の前に御坐り奉ッて　琴は
ひかずの、あがめられの、御立派なことで御坐り
奉ッて居るワイ。

八歳の時に　（學校の先生いはく）

皆サン、龜子サンの樣に大人しく爲て、ナンデも、
先生の言ふことを、よく聽かなければなりません。

十二歳の時に　（車夫こぼして）

エイ、コウ、自分の處位、人づかひの荒い家は無
いぜ。朝の六時から御孃樣を乘せて、先づ、漢學

……し 火の三
……ら琴の老師
……いが、皆か
……へでも持ッ
……ねいか。學
……の使わるき
……湯から裁縫
……しく〳〵かしく
……のぬたくら

文林



橋邊柳　　佐々木高行

谷かはのこけむす橋にわをやきの
みとりもふかくおひきける哉

曙梅　　東久世通禧

ともし火のほのかに殘る明かたの

…作 貫 兼

…が

ひとむら

地 厳 夫

…めるかな

郷 久 政

…はつはな

…はヽむ

武二のかはれさいせしれとみえて

おくしもしろく嵐吹なり

水鳥　　大畑弘國

とね川のあしの穂わたに風吹は

鴨の青羽にかヽるしら雪

心　　伊東祐賢

人みなのおのか心にそむきても

よこさの道をたとるはかなさ

海上雲　　竹尾正久

たにのこほりも今やとくらん

はゝむ

人

るらん

賀隨子

きの糸

島榮子

たにのこほりも今やとくらん

垣若草　　南郷柳子

袖垣のうらにはゆきののこれとも
おもてははるのわか草もみゆ

溪梅　　柳原愛子

みやこ人とくも梅見にきにけらし
溪のみゆきにあとのつきたる

古柳　　小池道子

我門のつゝゐのもとのふるやなぎ
くちても春をわすれさりけり

り

四甚之助

の溪水

りけり

えつゝ

患者等の境涯を愍然に思召めされ、特旨を以て、衣類を此の輩に下し賜はりたり。何時もながら、陛下の仁惠に渡らせらるゝは、臣民の感泣に堪へざる所にして、右恩賜に浴したる者共は、此の聖旨に拜接して、何れも感涙に咽び、殆んど、御禮の申上樣も知らざりし程なりしと云ふ。

●故有栖川宮御銅像製作　故參謀總長陸軍大將熾仁親王殿下は、懿親の高貴を以て、中興の大業を輔翼せられ、文武の間に出入して、常に重大の

たりき。其の製の不備に改作し、更に之に基きて、鑄型を作り

る廿九年三月[illegible]し後ち、いよ〳〵鑄造するものにて、三十一年九

りき。其の
廿九年三月、
將は、殿下
したるも、
、已む無く
に募りしに、
りて、他の
の方を採用
砲兵工廠内
なるが、最

製の石膏に改作し、更に之に基て、鑄型を作りし後ち、いよ／＼鑄造するものにて、三十一年九月始めて着手し、爾來三十ケ月の日子を經過し、是程漸く、油土の型像出來し、去る二日有栖川宮御當主の御檢分ありたり。來る八月中に、石膏の塑像出來する見込みにて、完成迄には、今後二年を要するならんと、右御銅像は、臺石と共に、高さ三丈二尺にて臺石は攝州の御影石を取り、二間四方の古今稀なる巨石なれば、其の運搬に少なからず困難したり。工事全体の費用は、約九萬七千

の過失より、先
舊縁者同村字
郎(十三)を、一昨
孝心深く、養父
神に參詣して、
には、間近き山
學傳をも爲し、
と、少年には珍

審を起せば、妻の語るやう、壽三郎豫て申すには
夕飼に餘り、腹を膨らしては、自然身體に惰氣を
生じ、眠に催すも其の爲めなり、勉强を爲すにも
此に注意せざる可らずと、豫て學校の先生に敎は
り居れば、若し看病に疎かありてはならずと、夕
餉を食するは、平生今頃には必ず、父上へ告げ給
ふなど言ひ居り、之までは態と隱くし置けりと、
涕と共に語りしとぞ、又昨年養母が實家に至りて、

に看病し、糞便
に替りて取り賄

(四十)の手一つに人となりしが、女親育ちの我儘者
ともなるとか、極めて孝心深く、窮通の間に農作

程病し、費傚
皆りて取り賄
言葉を掛ける
は、此しきの
か、喜一も試
學事の準備
れば、今更騷
摩など爲し居
よりは特待生
級長を爲し居

（四）この手一つに人と…した…
ともあるとか、極めて孝心深く、窮迫の間に農作に勵み、嘗て娶りたる妻さへ死別れ、殊には二十三年頃より、ハマが中風に罹り、身體不自由なるに、食事は更なり、汚物の洗濯に至るまで、忠實しく男手に取り賄ひ、十二年の久しき間野郎仕事疲れし時にも、一度として不足の色を現はさず、又一方には、妻が遺子の子供を勞り育だて、其の日さへ辛くも送る有様なるに、學校に送ることを怠らず、上納もの、如きも、衆に先じて納付し居、

其の
りたり。
登村武内英子が
る事は、去冬の
山縣知事より、

氣郡香登村
内　英　子

祖父母に養育せられ
らざるや幼弱の身な

大共に男兒よりも發達速なれども、以上廿歲迄は、其の力增加せざるなり。然るに、男子は之に反して、十四歲頃よりは其の發達頗る遲速にして、廿歲に達すれば、女子に比して、其の氣力二倍となるものなりと。是れ、通常幼時には、男兒より女子の方、大に發達せるが如きことを認むる經驗と、合一すと云ふべきなり。

●頭髮一夜に禿げる病　頭髮の禿げて丸坊主となる病、即ち禿頭病と稱するは、原名をアロエチ

二葉製丁

と爲りしが、
東京市内に
に付き、警視
該病豫防
菌は極めて
染したる人の
接に觸れたる
る時は、忽ち
りも寧ろ女に

で南に向へる枝には　既に數輪の花を着けたるも
少なからず、殊に、冬至梅のごときは、目下滿枝
珠を綴りて、幽香脉々百歩の外に傳はり、士女曳
杖の値なしとせず。殊に來る日曜日頃には、近郊の
竹寒く苔碧なる邊に梅を探らんとて赴く人も多か
るべければ其等の便にもと茲にかく記るす。

▲向島の百花園　寺島の渡頭より、一丁餘りな
る向島百花園は其のむかし、一年の日數に比して
三百六十株の梅を植ゑしが、爾來、年々多くの若
樹を曾植したれば、今は、其の數およそ四五百株

門の内には
の春を知らざ
し、皿門を入れ
居士の其なら
を載せて、番茶
既に枯れ朽ちて
を傴僂して過
ら、殊に、老人
株は、今や六

今し面き江東梅は三株ありて其のむかし將軍上覽の梅といふ樹は、二百餘株ありて、花は純白なり、淡紅あり、目下入口の二株、奥の一株咲初めたるが、概して二分の開花なるべし。追々に杖を曳ける人もあれば、既に來客を迎ふる準備は整ひありたり。

▲木下川の梅園　園は下木下川の岸に臨み、故勝伯の別莊なりしが、今は伯の愛顧を蒙りし某といへる人其の寮番せり。聞く此の園は、曾て同地

に、破産後、他
莊のことゝて、

兩三輪づゝ綻び初めたり。同所は、古木多く、殊
に殉國の英魂を祀れる神社の

破産後、他
ことゝて、
れば、衆と
しむ。されば
、商船學校園
百株あり、
寥々たるを
、宛然虬龍
し、劍戟相交
都下梅園多

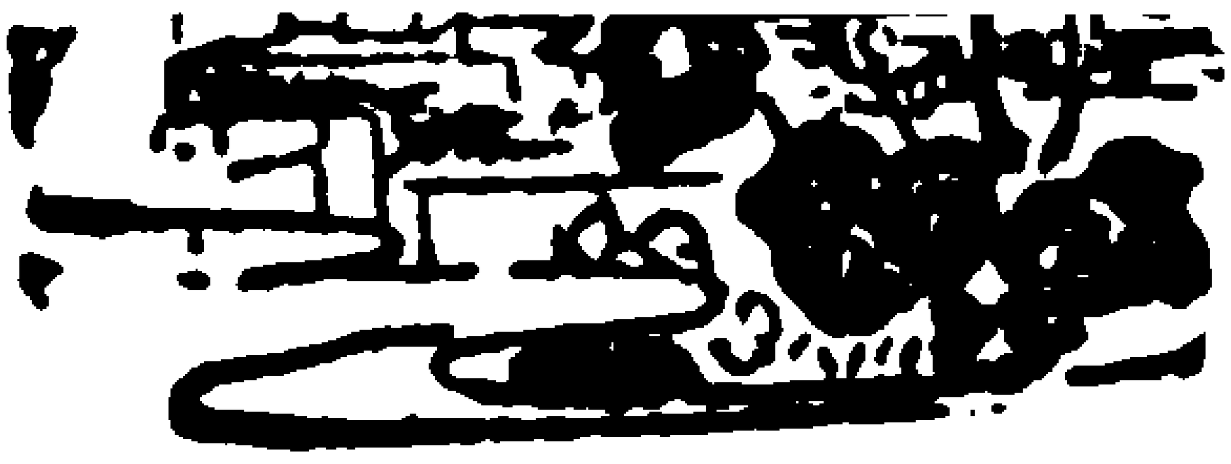
兩三輪づゝ綻び初めたり。同所は、古木多く、殊に殉國の英魂を祀れる神の庭とて、同じく梅の花ながら、何やらん氣品たかく、尊くぞ觀らるゝ。園内の茶屋には、既に火鉢座蒲團等の準備しあれば、徂きて香影の下を徘徊せんも興あるべし。

▲關香園、福茶、銀世界　豐多摩郡堀の内新街道なる關香園の梅は、昨今ちらほら咲そめたり、見頃は、二十日後よりならん。爰より數丁歩を南へ移せば、里俗鍋屋横町と稱する所に、數百株の古木あり、福茶と稱する觀梅亭あり、又新

御立寄の人は
札を掲げたる
は三四分ぞは
停車場の西南
理店明保野及
人の識る所あ
では観るに佳
るものあれば

少年世界（第七巻第三號）	東京	博文館
教王（第二十五號）	京都	同雜誌社
女子のとも（第八十四號）	東京	東洋社
女學の枝折（第十三號第十四號）	東京	女子講習會
國學院雜誌（第七巻第一號）	東京	國學院
日本婦人（第十五號）	東京	帝國婦人協會
たんな（第一號）	東京	大日本女學會
婦人と子ども（第一號）	東京	杉山辰之助
工談雜誌（第百三十四號）	東京	工談會
大日本婦人教育會雜誌（第百三十一號）	東京	大日本教育會

もゝしきの大うちやまのおひまつも
御代たことほきみさりますらん　牧[illegible]子



津峯子

…ってたき

千代子

もゝしきの大うちやまのおひまつも
御代をことほきみさりますらん　牧[illegible]子

春ごとにみどりふかめて千代八千代
まつにひさしくさかゆく御代　佐々小[illegible]子

たか松のみどりふかめてよろづよも
さかゆくらんきみがおほ御代　佐々有[illegible]子

色かへぬまつのみどりともろともに
さかゆくべき御代ぞたのしき　瀧口貞子

代々をへてみさりかはらぬ常盤木の
松のみどりにならひてしかな　北島操子

さかゆる松の尾やまのすゑかけて
さきはひきはになほやいのらん　北島松子

かみ代よりねさしかためし松なれは
ち代のさかゆはいちしるきかな　北島功子

二葉よりさきはのいろのまつがゆは
かはらぬみよのためしなりけん　山崎静子

さきはなる國生のまつの八千代にも　松尾富美子

仁保しま子

さ
伏脇米子

り
屋舗鈴枝子

り
松田なほ子

な
德永萬壽子

な
德永職子

ん
大木まさ子

る

いく世さかへむあひおひのまつ
武田八重子

榊代よりかはらぬ御代の露をうけて
まつはさきはにいく千代やへむ
山田稻子

ふくかせも枝をならさぬきみが代の
まつはいくだひちよや經ぬらん
山田米子

相おひのまつもみさりのいろそへて
ちよよぶたづのこへれをぞきく
代田伊蘇子

ふりつもる雪にたわまぬさきはきの
みさをぞ代々のかたみなるらむ
秋月綾子

子の日する野邊の小松はかぎりなき
きみのみいつの初めなるらん
穗積稔子

松さいへは久しきものゝためしにて
のき端に千代のこゑきこゆなり
古矢滿子

千代うさふ聲かさはかりきこゆなり
松浦いさ子

へは
館脇ます子

千代まさむ君がよはひのさしもにさぞ
みそのゝまつはおひはしめける
平野琴枝子

脇ます子

斐ちか子

塚てつ子

山あや子

環子

尾千代乃子

戸ゑい子

勝子

合[illegible]子

千代まさむ君かよはひのさしもにさそ
みそのゝまつはおひはしめける　平野琴枝子

さしなへてみさりかはらぬ松こそは
はてなきみよのすかたなるらん　丹下枝子

さゝらはにみさりかはらぬおほ庭の
まつにやちよをちきりそむらん　丹下花子

こゝのへの御にはに松のなかりせば
君の八千代をなにゝかたさへん　栗原濤子

四方の海のなみのしつけさ知られけり
にはにしけれるまつかひゝきに　笹子茂子

かせも枝ならさぬ御代やおのれから
こゑもておそふすみよしのまつ　笹子眞子

うこきなきみよしられけり九重の
みそのゝまつのさきはかきはに　椎野秀子

ゆくすゑのさかゆくらんひめ小松
かけにちさせのかすもこもれり　椎野蕭子

色かへぬまつにちさせ[illegible]契りおかん
きみがよはひのなかゝれさこそ　椎野清子

山綾子

長ひしに、今朝
夕、いと〳〵
たまひし由、御
さへ、御嬉し

りむへすかくあ

りおから、初産にてさへましませば、何で安かれかし、とのみ、祈り侍りし甲斐ありて、見事、玉の如き太郎君を、擧げさせ給ひけるとよ。鶯の初音にも一際勝りて、嬉しうおん。さても御許には、此年月居玉はざりける御中にさへ侍れば、花上の蝶、掌中の玉も、物の數かはと、愛でうつくしみ給ふらん。あはれ、父母のいづこへ似ざせ玉ふとも、すくやかにさかしき筋を、受け給ふらんと、成り出で玉はん行末さへ、思ひやられて、賴母しう且つは床しうなん。聞え上まほしき事、澤に侍れど、明日疾く參うのぼらんと、おもふものから、萬は省きぬ。況いて廻らぬ筆の、めでたしうれし

小杉みや子

承はれば、御新婦様には、昨夜、御若様御出産遊ばされ候由、御尊
家御一同の御喜び、此の上もなき御事と存上まゐらせ候。

へすかくを

嬢様御出生

こと子

にか、はじ
き、殊更御
かく／＼の御
一重ね、い
夜をかけて
しく御恥か
ばかりに候。
明日は、御伺
度と、樂み
くかしこ。

承はれば、御新婦様には、昨夜、御若様御出産遊ばされ候由、御尊家御一同の御喜び、此の上もなき御事と存上參らせ候。よりて、手細工のよだれかけ、不出來には候へ共、御祝の心ばかり、御目にかけ候間御受納下され候はゞ、こよなう嬉しく存候。

目出度かしこ

關　勝子

二月の空、未たのどかさ申程には侍られさ、昨日今日、遠近の梅の便、おのづから心地ゆかしう覺えられ申候。折から、昨朝はいさも平かに、若様御誕生あそばされ候おもむき、日頃の御のぞみ通りにて、さぞかし、御兩親樣御初皆々樣、御よろこびの御事と、目出度存じまいらせ候。耶もまふのぼる可の所、御承知の如く無人に候まゝ、さりあへず文もて、御祝あら／＼申上候。いつれ兩三日の中には、御やかたおどろかせ申べくなむ。なた餘寒きびしく候まゝ、折角御養生專一に遊ばし、一日も早う、御日立よろしき樣ゐのりおり候。かしこ。

片田きみ子

かれて今日さ承り、一同案じ申居り候さころ、御内室様には、昨

新に祉。何れ近き程の雁の走り書、列も餘りて、筆も心に粘はれかし。めでたくかしこ。

有賀けさ枝子

まさごの數々御めで御婿しさこよのう御及御祝ひのしるしましかるべく候。時節至尊一と存候。いづあら／＼かしこ

篠原菫子

玉のやうなるたのはべらん、御館の

申上候。扨、御産着一かされ、まゐらせ候た、幾久しう御受納下され度よろづは、御まのあたりに。あなかしこ

佐々有隣子

鶴の千代、龜の萬代、竹若丸の君の産聲、たかく生出たまへるよし、まことに目出度、御館の礎、うごきなく立榮たまふるん。御母子の君達、すこやかにましますよし承り侍る。御慶賀の祝詞あなかしこ。

北島松子

さしのはじめの御ことほぎも、さくより申へきたなこたり過し侍るは、なめしききはざにけん。承り候へば、今朝しも、朝日の豊坂のぼりのみひかりの、さし出むころおひ、やす穏かに生出給ひしは、玉の如きたの子み子にさへおはしますとよ、げに、月のかつらもたるばかりさよろこび給ひしと承る。いにしへの事も、まのあたりにてなん。いかに、御家の風も、ふきつたへ給ふらんと、いまよりみけしきおもひやられ侍り。いでや、御かた／＼樣の御うふ

さ、うちより御う
こゝろにかけさ
みよろこびは、
た登は、つくは
の、千代の御む
あなかしこ。

島　功　子

ごにはさ、推し
御祝あらせられ
候。御母様共、
き男の子のみ子

いさはしたなき調へさだに退けたまはれば、此上なき幸にこそ。いづれは、近くまうのぼりて、よろづ聞ゆあげまつるべくなん。

かしこ

山　崎　静　子

世に目出度ためしは、何くれさいさ多くは侍れど、うぶやの事はかり、うれしきは侍らずかし。そこにも、たゞにおはせずさうけたまはり侍りしかば、いつしかさのみ侍べりつるを、きのふ安らかに生れさせ給ひて、おん二所さもにいさすこやかに、玉のやうなるをのこにさへおはすさか、よそにだに嬉しさ限りなきを、まして御心の内は、いかばかりかはさ、おしはかり侍りぬ。よくよくひたち給へや、行末はたけき武士賢き人さなり給はん事。雄々き御うぶこゑにもいちじろくこそあな目出度あなかしこ。

久　代　さ　く　子

承り侍れば、よべ、御姉君には、やすく／＼さ玉の如き御男兒を、擧げさせ給ひし由、御目出度御祝ひきこへあげ候。御初めての御男兒に渡らせ給へば、御母君はいふにをよばず、御一門様の御よろ

小山つや子
聞は承らぬ折から、
は、御許様、いさも
の子生ませ給ひしさ
いよ〳〵吹き起り
に嬉しきものを、ま
子の數かぎりなう
るはしき御顔を拜し
却てなめげなれば、
に候へ共、御祝ひの
なば、参りて萬づ聞

方 下 花 子
〳〵さなの子産
も案しさせ給ひし



育要言　全

●郵稅金四錢
●郵券代用一割增
但一錢切手に限る

育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せ
謝婦女子たるべきものゝ標準を示し女子處世論を著はして女子の
公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ
り女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡
るに足る技倆を練らんかを述べらる蓋し世間女子教育の論尠から
るものなれは此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方
理を撰び叮嚀親切に說き諭されたるを以て獨り教育者のみならず
もてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべか
詳細は本書に就きて之を見るべし

本●女子教育の實況●一切の細





廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價　卅八圓
乙價　卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價　二百五十圓
乙價　百八十圓
丙價　百三十圓
丁價　九十圓
戊價　六十五圓
己價　五十圓

●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付角小判形無地印面指環
廿二圓四十錢

●純金五匁付角小判形無地印

●廿二金二匁付片切
甲價　十四圓五十錢
乙價　十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價　十九圓
乙價　十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ッ折片切彫刻
甲價　廿圓
乙價　十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ッ割平象嵌片ヶ彫刻付
甲價　廿三圓
乙價　廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

右の外金盤の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品々あり

貴金屬美術品商

門

電話本局三十三番
長距離電話接續

株式會社國光社印刷部印刷